

日本人であるということ
—桜と七夕、文化のはざままで—

皆様お久しぶりです、大瀧です。こちら中国では一気に気温が上昇し、瞬く間に春の陽気を迎えました。寒暖差は激しいですが日中はかなり温かく、本日ついに半袖を解禁しました。先日日本にいる母から桜の写真が送られ、日本の春を懐かしく感じているところです。今年は桜を直接見られないだろうと半ばあきらめていましたが、なんとキャンパス内と街中で桜(?)のような花が満開を迎え、思わず写真を撮ってしまいました。異国の地に居てもピンク色の花を見て春の訪れを感じ、やはり自分は日本人なのだと実感しました。



ところで突然ですが、皆さんは七夕の起源をご存知でしょうか。先日総合の授業で、同じ季節行事(节日)における母国との文化の違いを紹介する課題があり、私は七夕を選択しました。お恥ずかしながら、私は最近まで織姫彦星伝説の起源が中国にあることを知りませんでした。クラスに向けた発表準備にあたり調べ物をしていく上で、日中文化に大きな相違があることを知りました。調べれば調べるほど興味深いことが次々と出てきたので、本日はその中のいくつかを皆さんにご紹介したいと思います。

1. 中国では七夕がバレンタインデーのような位置づけである

中国では、日本のように短冊に願いを書いて笹に飾ったり、夏祭りに参加したりする文化がありません。彼らにとって七夕は、カップルが時間を共にするイベントのようです。デートをしたり、プレゼントを交換したりして、互いの関係を深めていくためのものなのだとか。奈良時代ごろに中国から日本に伝わった七夕が、日本の風俗と結びついたことで現在の文化が生まれた一方で、中国では時間の経過とともに元の姿が失われつつあるそうです。

2. 七夕の存在自体が薄い

春節を含めた他の季節行事に比べて、七夕は圧倒的に存在感がないです。

実際にクラス内で発表を終えた後、中国人の先生から“我不怎么过七夕节(私はあまり七夕を過ごさない/祝わない)”と興味深い一言を言われました。バレンタインデーのようなものだと先ほどお伝えしましたが、そのようにして過ごす人も実際は少なめだそうです。

しかし、数ある季節行事の中でも、七夕は日本人にとって比較的馴染み深く重要な行事なのではないでしょうか。幼い頃から短冊に願い事を書いたり、地元のお祭りに参加したり、またコンビニでは七夕にちなんだスイーツが販売されたり……。確かに七夕は「絶対に過ごさないといけない」ものではないかもしれませんが、しかしながら、夏の重要な風物詩の一つとして、どこか日本人の心の奥底に根付いている。それがあつて日常に彩りが生まれ、日々の暮らしがちょっぴり楽しくなる、それが七夕の持つ魅力なのだと思います。

このレポートも今回で 7 回目になることを考えると、時間が経つのは本当に早いと感じます。寒くなったと思ったら一気に春を迎え、あと 3 か月弱でこの留学が終わるなんて信じられません。残された日々を大切に過ごして、悔いなく終わりを迎えられるよう日々精進していきたいと思います。それでは来月またお会いしましょう。下个月見！